

1. 挨拶

令和6年は年初から北陸の地震災害という不幸な出来事から始まってしまいました。数え上げるまでもなく不安定な世の中となっていて一人浮かれている状況ではないことは悲しいことです。今年もコロナ、インフルエンザの流行が続いている現状では感染リスクを抑えながらの活動を強いられることになっています。不特定多数との交流はできる限り控えて仲間内での交流を第一とした活動を主体にせざるを得ません。昨年は3つの企画会議主催の事業を実施しましたが、今年令和6年も、この方式を続けて会員の皆さんの関心の多い事業を計画し、交流を深めたいと思います。また、参加者も増えて3組企画の盛岡城跡公園散策後の熊谷さんの紹介で新しい集える場所（バル石垣）ができたようなサプライズ展開があることを期待します。

2. 今年度の企画事業について

3組企画 盛岡城跡公園散策

- 1 日 時 : 10月5日(木) 1時30分～3時30分頃 小雨決行
- 2 集合場所 : もりおか歴史文化館 正面玄関前
- 3 案内役講師 : 戸澤 武美氏 旧盛岡藩士桑田 理事
- 4 参加者 7名 小野寺、馬場、深澤、

千種、熊谷、鈴木、対馬

所感 戸澤さんのガイドで、お城の中と外又盛岡藩主南部の殿様にまつわる説明を雨の中手作りガイド冊子を見ながら約2時間散策しました。散策後は熊谷先生の先導でお城下の「バル石垣」へ繰り出して楽しい時間をワインと共に過ごしてきました。



1組企画 わしの尾酒造見学会」

- 1 日 時 : 11月15日(木) 13:30～15:30
13:00頃 現地集合

- 2 参加者 6名 小野寺、深澤、馬場、千種、鈴木、志田

所感 初めての酒蔵見学でしたが、杜氏の方に純米酒、吟醸酒などの違いを丁寧に説明頂き大変勉強になりました。また今仕込んでいるお酒は翌年の秋口に販売されることも知りました。利き酒ではフランスで好評

を得たお酒を含めて 3 種類ほど頂きました。微妙な違いがありとても美味しかったです。早く生絞り原酒が出てくるのが楽しみです。深澤さん運転ありがとうございました。

3. 会員の移動

新たな会員の移動はありませんでした
入会会員 なし

4. コラム 『千石船 気仙丸』

みなさんは「千石船」というと何を思いつくでしょうか？普通に考えると北前船を思い浮かべるのが一般的かと考える。しかい岩手にもかつて「千石船」が存在していたのである。そしてその復元した実物が大船渡に展示してあるのだ。もともとは平成 4 年に開催された「'92 三陸・三陸海の博覧会」に「千石船を。住民総参加で気仙衆の心意気を」を合言葉に、大船渡商工会議所が中心となって、建造資金を集め、「気仙船匠会」の手によって、江戸海運の主役、千石船の復元・建造に着手したのである。「三陸・海の博覧会」の後は、海上に係留され、夏祭りのイベントや、NHK大河ドラマ「菜の花の沖」や「龍馬伝」等のロケにも利用されていたが、建造から 30 年が経過して



船体の傷みが大きくなった為、補修・補強が施されて、令和 3 年に陸揚げ展示されるに至ったわけである。展示場所はキャッセン大船渡の隣にある鴉の玉子で有名なさいとう製菓のお店「カモメテラス」からほんの少し北上した信号機のところである。では何故気仙地方で千石船なのだろうか？少しひも解いてみたい。気仙地方は、寒流と暖流がまじりあう三陸漁場に位置し、古くから漁労を中心とした生活が営まれてきた。そのためもともと造船の技術も高く、また気仙杉や五葉檜、赤松、樺などの良材に恵まれ、船大工の出稼ぎなどと相まって造船技術も各地から導入され、工夫が凝らされてきた。なるほど、筆者が中学生の頃までは確かに、船は木造船が主流であった。現在のFRP技術が出る前は、カッコと呼ばれる小型の船は全て木造船で、港のいたるところに造船所があったと記憶している。それではいつ頃から船舶での物流がはじまったのであろうか？どうも平泉で奥州藤原氏が繁栄していた時代らしい。藤原氏と言えば黄金の国ジバングを代表とするように金の国内有数の産地を保有していた。特に平泉から東側の地域では玉山金山をはじめとする有数の金鉱や砂金の産地があちこちにあった。しかし当初は陸路で平泉まで運んでいたが、やはり野盗や山賊に襲われる

ケースがしばしばあったようだ。そこで海路が比較的 안전한金の搬入手段となり、船が



用いられるようになったようだ。そして、そこから造船技術が少しずつ改善していったと推定される。その後吉里吉里善兵衛などの豪商が出て、江戸、大阪との物流手段として、船の大型化が進んでいった。江戸時代には大型船〈弁才船〉が北上川を上って盛岡まで来ていた。盛岡の明治橋のたもとに、弁財船の船着き場があった事も分かっている。当時の盛岡では京・大阪殻運ばれてきたものを「べんじえもん（弁才船で運ばれて来たもの）」と呼んでたいへん重宝したようだ。そして盛岡の代表的な和菓子である、「きりせんしょ」や「うちわ餅」などはべんじえもんとして現在まで残っている。それにしても当時の千石船を復元するという事はものすごい労力が必要だったと考える。その時には日本国内には船の模型が博物館に残されている程度で、実物大で現存するものは一隻もなかったらしい。実際に当時のままに建造・復元できれば、単に三陸博に展示するだけではなく、学術的にも貴重なものとなると考えられた。これを実現したのは、気仙船大工の匠たちのおかげであることは言うまでもない。しかも実際に海を走ったのである。驚愕に値するものである。陸上展示ではあるが、実際に見てみるとその技術の高さに驚かされるばかりだった。良くはわからないが、感覚的にも船のバランスと荷物の積み方とか微妙に難しい問題があったものと推定され。また船首につけられて龍の彫刻にも目を見張るものがあった。まさに先人たちの技術の集大成だと感じざるを得ないものであった。

最後にちょっとしたグルメ情報を。キャッセン大船渡にある「ガガニコ食堂」である。この店名の由来は、ケセン地方に伝わる虎舞をお囃子し無しで舞うときに口ずさむ「ガガニコニン、ガガニコニン」からきているようだ。この店の売りは何とんでもワンコインで食べられる「浜井」であろう。写真が浜井である。味噌汁（あら汁）と小鉢等はオプションであるが 500 円で海鮮丼を食べられるというのは 【店の外観】 【浜井とあら汁】 魅力である。地元で水揚げされた魚を中心に盛り付けられている。限定食なので、遅くいくと無くなっている事があるので、開店と同時の入店を勧める。この時はホヤの刺し身もオプションで頼んだ。鮮度抜群なのでとても美味しく頂いた。またこの日本そばも本格的で美味しいとの話である。もちろん通常の海鮮丼や、季節のうに丼等もそろえてある。大船渡に行った際には是非立ち寄ってみてはいかがであろうか？



5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈だよりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail mitshida.1029@docomonet.jp

6. 編集後記 「分からない事ほど面白い」

志田

皆さんは、東北人の先祖である「エミシ」と北海道の先住民「アイヌ」の違いについて考えたことがあるだろうか？一般的にはアイヌは現在のエスキモーが流れ着いた民族で、エミシは南方系の人達が流れ着いた民族とのイメージがある。しかし、東北地方では、エミシとアイヌとの交流が盛んにおこなわれていた事が確認されている。特に縄文時代には、岩手の沿岸部などでは、アイヌにまつわる地名が残っているとされる。当然人的な交わりも生じたことであろう。このように物事を考えるとききれいに線引きできない事が多いと思う、だからこそ歴史ミステリーに成り得ると考えるし、分からないから面白いと考えることが出来る。未だに分からないことだらけの筆者にとって、まだまだ興味のネタは尽きないのである。

以上